



<第5回> 男はつらいよと満州

有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家。
写真は、旧関東軍司令部。現中国共産党吉林省委員会(長春) 筆者撮影

だろう。

映画をテキストとして、社会や歴史を考えるのにこれほどふさわしい素材はないだろう。

毎回、寅さんが惚れる女優陣に加えて、大物俳優が続々と登場するのもこのシリーズの楽しみである。時間を戦前からつなぐ意味で、山田監督をはじめとして、満州にかかわりのある役者たちを、以下紹介する。

タイトルの○数字はシリーズ第何作目かの意。ただし、渥美清死去(一九九六年八月四日)後の『寅次郎ハ イビスカスの花特別篇』(一九九七)、『お帰り寅さん』(二〇一九)と山田洋次脚本のフジTVの同シリーズ(一九六八)二十六回は省く。加えて満州は正しくは

「満洲」だが、満州表記とする。

山田洋次(一九三二～)

大阪府豊能郡豊中町(現豊中)の生まれ。二歳で満鉄中世の生まれ。二歳で満鉄技術者の父とともに一家で満州へ渡った。一九四六年三月までの十三年間、奉天(現瀋陽)、ハルビン、新京(現長春)、大連と移り住む。ただし、一九四一年から三年間は東京に暮らす。

敗戦時、ソ連軍が侵攻、

八路軍(中国共産党軍)に住宅も接収され、命からがら引き揚げる。山口県宇部の親戚宅に身を寄せる。

小学五年のとき、ジフテリアにかかる。さすがの大病に、父に「何か欲しいものはないか」ときかれ、『落語全集』(講談社刊 全三巻 2400頁)を買ってもらった。

山田洋次の喜劇は落語色が強いが、『運が良けりや』(一九六六)は全編が落語そのものである。翌年には柳家小さんのために落語第一作『真二つ』を書いている。今でも同『頓馬の使者』と併せてCD(キングレコード)で聞ける。

山田洋次監督(一九三二～)

色強いが、『運が良けりや』(一九六六)は全編が落語そのものである。翌年には柳家小さんのために落語第一作『真二つ』を書いている。今でも同『頓馬の使者』と併せてCD(キングレコード)で聞ける。



リリー役の浅丘ルリ子、右は寅さん=渥美清(1928～1996)

一九四〇年、新東京の生まれ。父は満州国経済部大臣秘書官。父が軍属としてタイのバンコクに移り、三歳から同地に暮らす。敗戦の翌年引き揚げ

十五歳のとき、井上梅次監督の『緑はるかに』(一九五五)でデビュー。同年の川島雄三監督の『銀座二十四帖』は見たが、銀座の花売り娘役がかわいい。これが故あってドサ回りのリリーに至るわけである。井上梅次(一九三二～二〇一〇)は、一九六三年から五年間、香港のショーブラザーズに出演して十五本ほど監督している。石原裕次郎をスターにし、浅丘ルリ子を発掘(命名も)した職人監督である。月丘夢路の夫で、都内の喫茶店チエーン(名前は失恋)の経営でも成功している。松竹の『人間標的』(一九七二)の現場を見学したことがあるが、その年に香港でも二本、日本で三本を撮っている。京都の下京区堺



笠智衆(1904～1992)、寅さん映画では柴又帝釈天の「御前様」役

町の生まれ。学徒出陣の関東軍経理学校を経て、戦後、慶応に入った。笠智衆(一九〇四～一九九三) 元憲兵大尉・甘粕正彦が満州映画協会(満映)の理事長に就任したのが、発足二年後の一九三九年。その翌年、松竹との連携第一回作品『黎明曙光』(山内英三監督)で笠智衆は主役を演じた。満州での匪賊討伐作戦の中で殉死した清水裕吉警察官の役。この映画は笠智衆の作品歴からも、も

れ落ちていて、作品、監督ともによくわからない。笠智衆は熊本県玉名郡の真宗本願寺派来照寺に生れている。本名である。どの映画に出ても熊本弁丸出し。京都市中京区生まれの田中春男が京都弁で押し通したのと並んで、すこぶる好ましい。

フランスのジャーナリストが『男はつらいよ』の撮影現場に取材に来た。軽い娯楽映画との気持ちだったらしいが、小津安二郎作品の笠智衆が現れたのでたちまち緊張、態度を改めたという。ここ数年、フランスでは『男はつらいよ』の研究書が出版されたり、特集上映が催されたりしている。

<この項つづく>